

## 大豆で吸実性カメムシ類の被害が懸念されます！

大豆ほ場における前回の見取り調査(8月中旬)では、吸実性カメムシ類が多い状況でした(植物防疫ニュース速報No.14参照)。

9月4~5日の調査でも、吸実性カメムシ類成虫の発生ほ場率は依然として過去10年間で最も高く、頭数も平年より多い状況です(表1)。幼虫のほ場率も平年を上回っているため、子実肥大中後期の加害による減収、品質低下が懸念されます。

また、フタスジヒメハムシ(写真6)の発生ほ場率も依然として平年を上回っており、注意が必要です(表1)。

9月の平均気温も高いと予想され、本年のように高温の年は、マメシンクイガ、シロイチモジマダラメイガ等の子実を食害(写真7)する害虫増加も懸念されます。発生の動向に注意し、適切な防除を行いましょう。

表1 大豆における害虫の発生状況(9月上旬)

分類	発生ほ場率(%)		頭数(頭)/25株	
	本年	平年	本年	平年
吸実性カメムシ類成虫	40.0	14.8	0.6	0.1
"    幼虫	23.3	14.5	0.4	0.5
フタスジヒメハムシ	46.7	35.0	2.3	2.3

9月4~5日15地点30ほ場で見取り調査を実施  
平年値:平成14年~23年の平均値



写真1 ホソヘリカメムシ  
(成虫)



写真2 イチモンジカメムシ  
(成虫)



写真3 子実の吸汁痕



写真4 大豆吸実中の  
ホソヘリカメムシ(幼虫)



写真5 アオクサカメムシ  
(幼虫)



写真6 フタスジヒメハムシ（左上）による莢の被害と黒斑粒



写真7 マメシクイガ幼虫による子実の食害

【防除対策】

- ・ 害虫の発生が多い場合は、子実肥大後期まで短い間隔（約10日間）で薬剤散布する。なお、薬剤は莢によくかかるように散布する（粒剤除く）。

表2 大豆の害虫に登録のある主な薬剤

（平成24年9月3日現在）

農薬名 (使用方法:散布)	害虫名				使用時期 / 本剤の使用回数	成分 / 成分の総使用回数
	カ メ ム シ 類	ハ ム シ	ガ メ シ ン ク イ	マ シ ダ ロ イ メ チ イ モ ガ ジ		
トレボンEW					収穫14日前まで / 2回以内	エトフェンブロックス / 2回以内
トレボン乳剤					収穫14日前まで / 2回以内	エトフェンブロックス / 2回以内
キラップフロアブル					収穫7日前まで / 2回以内	エチプロール / 2回以内
スタークル液剤10					収穫7日前まで / 2回以内	ジノテフラン / 3回以内 <sup>1</sup>
スタークルメイト液剤10						
ダントツフロアブル					収穫7日前まで / 3回以内	クロチアニジン / 4回以内 <sup>2</sup>
スミチオン乳剤					収穫21日前まで / 4回以内	MEP / 4回以内
ダイアジノン粒剤5					収穫30日前まで / 5回以内	ダイアジノン / 6回以内 <sup>3</sup>

1 は種時の土壌混和は1回以内、散布は2回以内

2 は種時の土壌混和は1回以内、散布は3回以内

3 種子粉衣は1回以内、粒剤は5回以内

詳しくは農業環境指導センター (<http://www.jppn.ne.jp/tochigi/>) までお問い合わせください。

Tel(028)626-3086 Fax(028)626-3012